

正倉院年報

一、古裂の整理

昭和三十年度における古裂整理は指布屏風袋の修理と錦綾絹絶の残片の整理である。その整理を終へたものは左のとほりである。

一、指布屏風袋第六十号—第六十三号 四口

表に褐色の花文を摺り、裏布は無地袷袋である。各々残破闕損甚しく新布を補つて修理復原した。いづれも屏風名の記載を逸するが、摺文の形式から考へるに献物帳所載の屏風を納めた袋であつて、庸布を用ひて作られたことが調庸に関する識銘によつて知られる。墨書あるものを左に掲げる。

一口第六十号 墨書「武藏国橋^(郡)庸布^主当国司史生^{八位}

郡司 国印二顆

一口第六十一号 墨書殆んど湮滅して微かに「家郷戸主、庸、当国司」等の文字が読めるに過ぎない。国印二顆、但し国名不明

一、古裂帖 六冊第五六〇号—第五六五号

錦綾絹絶の断片千百三十五片を分類整理して古裂帖六冊に分貼した。中に就て綾文に織出された唐花文内に向ひ合つた花喰鳥を配した双禽唐花文綾、雲鳥唐草等を巧みに構成した雲鳥唐草文綾、雄大な葡萄唐

草文綾は小片ながらこの時代の趣向を表はす文様として看過出来ない。(図版第二)

二、聖語藏経卷の修理

本年度において修理を完了したものは神護景雲二年御願経三十卷、乙種写経三十二卷計六十二卷であつて、それぞれ旧態により修理し、その軸及び軸端の逸したるものは古様を模して之れを補ひ、標紙の闕失したるものは新補した。即ち左のとほりである。

一、神護景雲二年御願経 第一三六号 根本百一羯磨 八卷 ^{並に繪染標} 赤蜜陀軸

卷一 卷首に大唐中興三藏聖教序がある。軸端一方新補

卷二 軸端一方新補

卷三 卷四 卷七 卷八 卷九 卷十

本経卷は奈良時代の写経中においても筆蹟優秀にして且つ一行十二、三字詰の大字経として珍重せられるものである。本経の懷巻である根津美術館所蔵の卷六は新国宝に列する。(図版第二)

一、同 第一三七号 仏説明度五十校計経卷上一卷

浅紅麻紙、赤蜜陀軸、軸端一方新補

一、同 第一三八号 楞伽経卷二 一卷

黄麻紙、赤蜜陀軸、尾題上に「東大寺印」を捺す。卷末背書「二校大和、落」標紙及び卷首闕失、今標紙を新補した。

一、同 第一三九号 雜阿毘曇心論卷八 一卷

黄麻紙、白蜜陀軸、卷末背書「二校清成、落一誤二」標紙及び卷首闕く、今標紙を新補した。

一、同 第一四〇号 仏説称揚諸仏功德經卷下 一卷

黄麻紙、赤蜜陀軸

一、同 第一四一号 仏説菩薩行方便境界神通變化經 二卷

黄麻紙、赤蜜陀軸

卷一 標紙及び軸一方闕く、並に新補

卷二 標紙新補

一、同 第一四二号 造立形像福報經 一卷

黄茶毘紙、卷末背書「二校高向、如前」軸両端闕失、今これを新補した。

一、同 第一四三号 法滅尽經 一卷

黄茶毘紙 赤蜜陀軸

一、同 第一四四号 優婆夷淨行法門經卷上 一卷

黄茶毘紙 赤蜜陀軸

一、同 第一四五号 象腋經 一卷

黄麻紙、白蜜陀軸 卷末背書「初校、五、无事、加卅一帙」

一、同 第一四六号 道神足無極變化經卷下 一卷

黄麻紙 卷末背書「大伴、一字□、高向、若」誤一、軸新補

一、同 第一四七号 阿毘曇經 二卷

卷廿二 黄麻紙、卷中黄茶毘紙を混ず、赤蜜陀軸 卷末背書「十二枚楊二校大伴、无事、□校淨成如上」本經もと卷廿一となす。今尾題により改めて卷廿二と訂正した。標紙、卷首及び軸端一方闕く、標紙、軸端並に新補した。

卷廿七 黄茶毘紙、二張黄麻紙、赤蜜陀軸、標紙、卷首及び軸端一方並に闕く、今標紙及び軸端を新補した。

一、同 第一四八号 大方等陀羅尼經 四卷

卷一 卷二 卷三 卷四

並に黄麻紙、赤蜜陀軸、但し卷二は軸端一方闕け、卷四は標紙題書及び軸端一方闕く、今各軸端を新補した。

一、同 第一四九号 根本説一切有部毗奈耶頌 四卷

卷一 卷二 卷三 卷五

並に黄麻紙、白蜜陀軸、但し卷二は軸端一方闕く、今之れを新補した。

一、同 第一五〇号 文殊尸利行經 一卷

黄麻紙、紫檀軸、標題書はあと書である。

一、乙種写經第一五号 大方広仏華嚴經百四十卷の内 三十二卷

卷九 卷九 卷九 卷十 卷十 卷十 卷十一

卷十一 卷十一 卷十二 卷十二 卷十二 卷十三 卷十三

卷十三 卷十三 卷十三 卷十四 卷十四 卷十四 卷十五

卷十五 卷十五 卷十五 卷十六 卷十六 卷十六 卷十六
右はいづれも鎌倉時代の書写本であつて、六十卷本(旧訳)、八十卷本(新訳)、四十卷本(新訳)の三種に別れ、かつ装訂紙質等より考察するに更に六十卷本において五種、八十卷本において三種、四十卷本一種に分類される。たゞし卷十六、四卷中の一卷は華嚴經ではなく、華嚴經論卷十六であることが発見された。今各々分類整理して修補した。その卷末に識語のあるものを左に掲げた。

卷十三卷 十四 (各新訳)

各卷末識語「貞永二年二月十日 校合了」

卷十一 (旧訳)

卷末識語「文永十二年乙亥三月十日申時於東大寺尊勝院新堂付善引料畢

前権僧正宗性

徳治三年二月廿三日於東大寺三面僧房西室実相院写之畢 覺聖」

卷十三 (旧訳)

卷末識語「延慶二年二月十六日善并引科点并畢 花嚴宗覺聖」

卷十三 (旧訳)

卷末識語「貞治丁卯月九日結縁比丘源珠并大旦那伝智大德敬白」

又云「一了了」

卷十四 (旧訳)

卷末識語「貞治丁卯月十一日結縁比丘源珠并大旦那伝智大德敬白」

又云「一了了」

華嚴經論卷十六

右經論一卷は華嚴經卷十六として誤つて混入してあつた。調査するに甲種写經第八十八号に大方広華嚴經論卷三、卷十四、卷十七、卷十八の四卷があつて本經はその僚卷であることが明らかになった。平安初期の書写本であつて、奈良朝写經の遺風を存し筆蹟また雄勁である。

華嚴經論は北魏の學僧曇弁の選述にかゝり華嚴經を注釈したもので全百卷といはれる。散失甚しく現存するものは他に数卷あるのみで、聖語藏には本卷を合せ五卷あり、しかも現存華嚴經論中最古の写本として珍重せられるばかりでなく仏教學界においても重視される資料である(図版第二)

三、御物の修理

御物の修理は明治年間宮内省に正倉院御物整理掛を置き専ら御物器財の整理修理を行はれたが、明治三十七年同掛の廃止と共にその業も中絶した。しかし未整理の御物櫃篋几案楽器等残欠及び雜材がなほ二十数合の辛積に納められてあり、これ等の御物の調査も一応完了したから本年度より順次整理修理に着手することゝなつた。即ち、本年度において修理の完了したものは左のとほりである。

一、粉地彩繪倚几 一枚

南倉納物子日目利簾の倚几として仮りに宛てられているがその用途

は不明である。紫色粉地に花鳥絵を描いた四稜長花形の几で、中央に二柱を立て四脚を附したもので、四脚は附着の痕跡のみ残る。仮宝庫にある器物残材雜塵中に胡粉地雲形の脚一と同残闕を発見殘闕を修補すると共に不足の二脚を新造して復原修理した。

一、絵彩絵長方几 一枚 竪五三・四櫃 幅八二・八櫃
高六・五櫃

板面は礫地のまゝであるが、底裏に白緑を塗り側面には唐花唐草文と毘沙門亀甲文を描く。床脚の香挾間には仮瑤瑁模様を描き小口には緑青、裏は丹を施し、疊摺（土居）側面は赤地に硯花文、脚下に当る部分には金具形に唐草模様を描いた美麗なる几である。恐らく献物几の一であらう。（図版第三）

一、絵彩絵八角箱 一合 径七五・五櫃 高一五櫃

印籠蓋造、身には床脚を附す。蓋表中央に大花文を描きその周圍に飛鳥花文を配し縁に沿ひ緑青地に硯花文を描いた幅四・八櫃の帯を作る。側面には彩絵を施した形跡あるも磨滅して文様不明、内面は丹を塗り胡粉にて描いた五弁の小花文を散らす。用途は詳かでないが仏前献物の容器であらうか。（図版第四）

四、御物の特別調査

(1) 髹漆品調査

昭和二十八年より始められた髹漆品の調査は本年を以て完了し

た。この調査は主として漆皮箱を中心とし、その製作過程及び技法を明らかにせんとするものであつて、皮革の上に漆を塗つて仕上げられたものの、皮革と布とを併用せるものの、皮革を用ひず布を重ねて心とした所謂乾漆製のものが漆皮と誤られていたことなどが解明された。更に当代に行はれた末金鏤、平脱平文の技法も究明せられ、過古数十年に亘り論争されていたこれ等の問題も近く解決せられるであらう。調査員は東京芸術大学教授松田権六、文化財専門審議会委員吉野富雄、東京国立博物館漆工室溝口三郎、同資料課長岡田護、漆芸家北村久造の諸氏である。

(2) 材質調査

材質調査もまた昭和二十八年より開始し本年度で一応完結を見た。動物質の鯨骨、鯨鬚製品、皮革品、貝真珠等を、植物質においては木実、草木の類、鉱物質では硝子製品及び破玉中より発見した岩石、琥珀等を主として調査した。中でも北倉に納める大魚骨笏はマッコウ鯨の骨であり、南倉にある柿柄麁尾の毛はナガス鯨鬚であることが判り、中倉の斑蘭の経帙は蘭に附着する花穂からシカクキと推定され、同斑蘭箱蓋及び南倉の蘭箱はいづれもガマの葉の製品であることが確認された。またラジオアイソトープによる鏡類の錫又は鉛の含有の有無、硝子玉の鉛含有率などの測定が行はれた。また各種平螺鈿背鏡の地が従来漆で堅められたものと考へられていたところ、紫外線ランプの照射による調査の結果、その発する螢光により漆地ではなく樹脂様のものであることが認め

られる等幾多の興味ある結果を得た。調査員は動物質国立科学博物館動物学課長滝庸、農林省輸出品検査所畜産課長石渡達六郎、東京大学農学部講師財団法人鯨類研究所員西脇昌治、山階鳥類研究所長山階芳麿、植物質関東学院大学教授大賀一郎、お茶の水女子大学教授大槻虎男、奈良女子大学教授清水卓二、東京大学理学部講師亘理俊次、鉱物質国立科学博物館事業部長朝比奈貞一、京都薬科大学講師益富寿之助、名古屋大学教授山崎一雄、科学研究所主任研究員山崎文男の諸氏である。

五、聖語蔵古訓点経巻の複製

聖語蔵経巻は隋唐奈良平安時代の古写経の宝庫として有名であるが、これ等の経巻中に施されてある白点は我が国語学の重要な資料として珍重せられるものである。しかしながら白点はその性質上年月の久しきにより磨損湮滅の状態にあるものもまた少なくない。依つて本年度よりその磨滅の甚しいものから順次移点複製して古点を保存し、かねて研究の資料とすることにした。移点は点本の研究者奈良学芸大学助教鈴木一男氏に依頼して行ひその移点複製を完了した経巻は左のとほりである。

天平十二年御願経第八一号 四分律 卷廿七、卷卅六 二一卷

六、御物のカラー・スライド及び古文書等の

マイクロ・フィルム of 複製

御物のカラー・フィルムによる撮影及び古文書等のマイクロ・フィル

ムの複製もまた前緒を継ぎ行はれ、カラー・フィルムの撮影は一〇〇コマ、マイクロ・フィルムの複製は左のとほりである。

天平勝宝八歳六月二十一日献物帳 国家珍宝帳 一卷

同 種々薬帳 一卷

天平勝宝八歳七月二十六日献物帳 屏風花氈帳 一卷

天平宝字二年六月一日献物帳 大小王真蹟帳 一卷

統集正倉院文書第十一卷—第五十卷 四十卷

統修後集正倉院文書第一卷—第二十卷 二十卷

七、正倉院評議会

昭和三十年度においては、六月六日に第十四回の会議を開催し、曝涼の方法、庫内の特別観覧、奈良国立博物館への御物の貸出、御物の特別調査、御物のカラーフィルム撮影、古文書のマイクロフィルム撮影、御物の修理、新宝庫の使用、保存修理室の使用、御物の防虫用殺虫機の利用及び史跡東大寺旧境内の現状変更等について審議した。

紀要第四号正倉院密院絵調査報告正誤

81頁上段第17行中「唐草文」を「花蝶文」に改める。

81頁上段第19行中「(図版第二)」を削る。

83頁下段20の次に20の2として次のとおり加える。

20の2七四一号破陣楽大刀鞘二口の内一(南倉階下)

黒漆ぬり鞘の上に白色顔料にて唐草文を描く蛍光及び手法は20と同じ(図版第二)

図版第二「307金銀鉏莊唐大刀」を「741破陣楽大刀」に改める。